

広域計画策定段階におけるワークショップ手法の実践と課題
～高知広域都市計画区域マスタープラン検討委員会を事例として～
(要旨)

高知工科大学大学院工学研究科基盤工学専攻社会システム工学コース
1055132 有元和哉

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年、全国各地で住民の多様なまちづくり活動が、かつてない盛り上がりを見せている。北海道から沖縄まで、巨大都市から過疎の農山村まで、住民主体のまちづくりの芽が見られないところはない。また、政府から小さな市町村にいたるまで行政は、「住民参加のまちづくり」を提唱している。そして、その「住民参加のまちづくり」を支える一つとして「まちづくりワークショップ(以下「まちWS」と略す)の方法と技術は、日本全国に広がった。

「まちWS」の核心は、新しい社会的コミュニケーションの世界が開かれるところにある。市民と行政の間の壁、市民相互の間の壁が、「まちWS」によって、思いがけないほどあっけなく乗り越えられる。このことが、それぞれの主体の間にあったワダカマリや、消極的な姿勢を見事に溶かし去り、まちづくりにおける住民と行政のパートナーシップという長年の課題が「まちWS」によって溶解し始めている。[林,1996:9]

90年代、都市計画法改正による市町村都市計画マスタープラン(以下「市町村MP」と略す)策定への住民参加と、河川法の改正による計画への住民参加が制度的にビルトインされた。

市町村MPは、市町村都市計画に関する基本的な方針が制度化されたもので、市町村MPの注目すべき点としては、その策定過程において市民参加を取り入れることが義務づけられたことにある。

しかし、参加の手続きに具体的規定が欠けた結果、アンケートを「住民参加」と称したり、計画策定委員会に、住民がおすみつき程度に参加しているといった例は枚挙にいとまがないが、一方、いくつかの市町村では、市町村MPにおいて、試行的にはあるが「まちWS」を進めており、住民参画の成果も見られる。

また、「都道府県都市計画区域マスタープラン(以下「区

域MP」と略す)」は、市町村MPの策定を受け、2001年5月制定された。高知県は2002年「高知広域都市計画区域マスタープラン(以下「高知区域MP」と略す)検討委員会(以下「高知区域MP委」と略す)」を設置し、策定作業を「まちWS」を行い、県民参加(参画)の計画づくりをすすめている。

1.2 研究の目的

本研究では、広域計画策定段階における「まちWS」の方法論の一般化を図るための前段として、高知区域MP委における「まちWS」の提案と実践を通じて、このまちWS手法の成果・問題点を整理し、課題を抽出することを目的とする。

1.3 既往研究の状況と本研究の位置づけ

ワークショップ(以下「WS」と略す)の定義やその歴史・概要については、中野[中野,2001]によってわかりやすくまとめられている。また、「まちWS」については、林・大谷らによって「まちWS」の意義やあり方、「まちWS」の全体的有効性について論説[林,1996や、大谷,2002]がある。さらに、「まちWS」の技法等については、世田谷まちづくりセンターによって「参加のデザイン道具箱1～3」[浅野義治ら,1994,1997,1999]としてまとめられている。ちなみに、高知県における「まちWS」の現状と課題等については、大谷や有元、廣澤[大谷,1999、廣澤,2002、有元,2000]等の研究がある。

計画策定に関わる「まちWS」の有効性等について、市町村総合計画策定過程では、「まちWS」の有効性や活用と展開可能性についての大谷らの研究[大谷,2001や大坂谷,2000]がある。また、「市町村MP」策定過程では、渡辺らから「市町村MP」策定段階の現場からの報告として、市民参加の各種の試みが報告[渡辺,1999]されており、さらに、個別の詳細な報告としては、浅野らによる伊勢市都

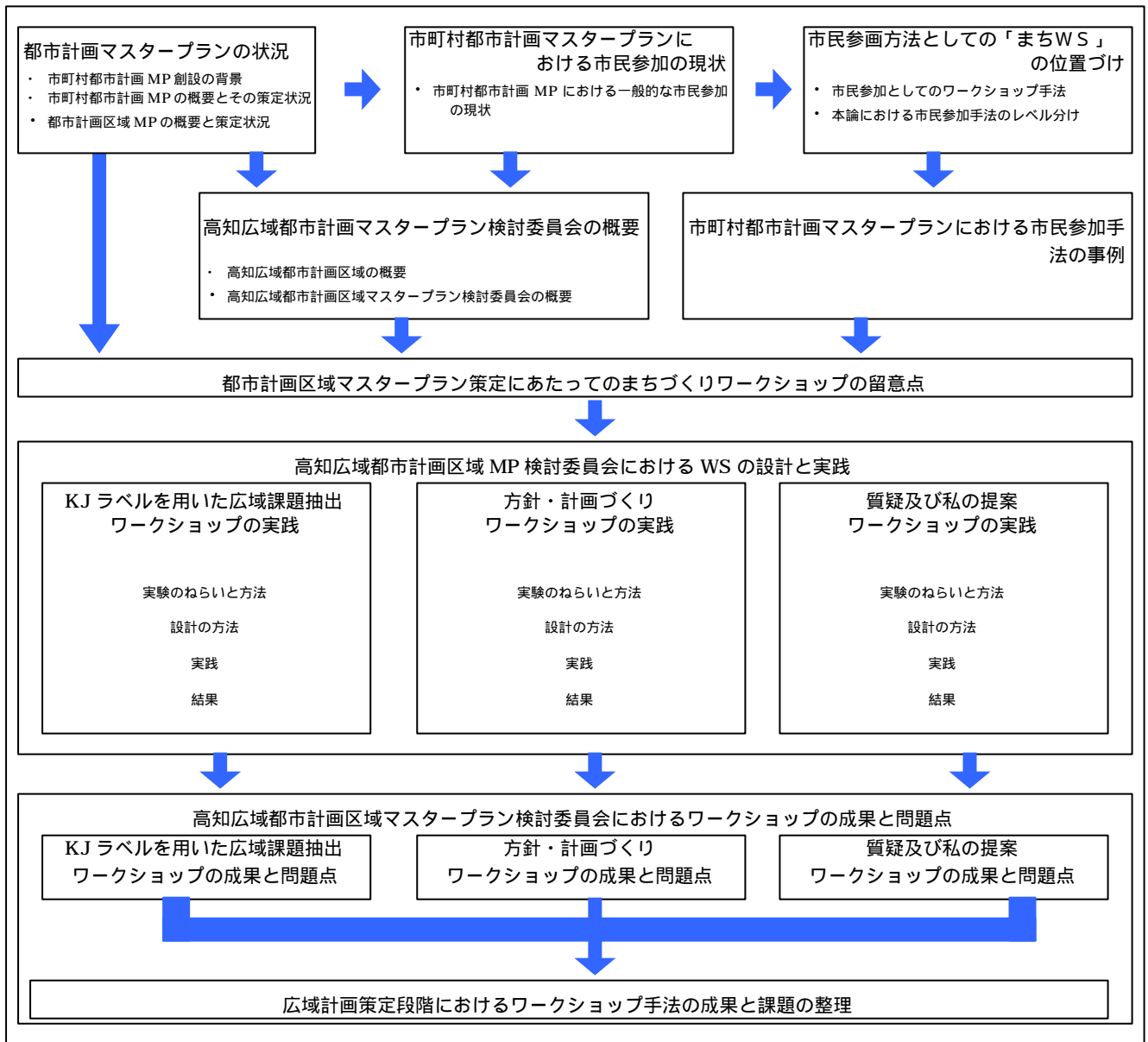


図1 研究の方法

市マスタープランにおける市民WSの実践と評価 [浅野, 2000] や大和田の東京都調布市を例としたWS方式による市町村MP策定成果と問題点 [大和田, 1998] がある。

市町村MPの策定現況と市民参画の状況については、国土交通省の調査 [国土交通省, 2001] や内田他の九州地域74自治体をケーススタディとしての地方都市の市町村MPにおける策定プロセスと住民参加に関する研究 [内田, 1998]、大崎らの研究 [大崎, 2002] などがある。

また、区域MPの策定現況については、日本建築学会のアンケート調査による中間報告 [日本建築学会, 2002] があり、また、区域MPの市民参加 (参画) の困難さについての指摘が中井 [中井, 2002] によってなされている。

「まちWS」は、これまで、施設づくりや地区 (コミュニティ) の計画づくり、そして、上記したように市町村の

領域を対象としたものが多く、広域を対象とした「まちWS」の方法は未知である。また、区域MPの策定といった広域における市民参画の計画策定 (「まちWS」による計画づくり) の報告はまだなされていない。

そこで本研究は、広域を対象とした計画策定段階における「まちWS」の方法の開発及びその有効性に関する検証研究として位置づけている。

1.4 研究の方法

本研究の方法は、第一段階として 都市計画マスタープラン (市町村MP、区域MP) の策定状況や、市町村MPにおける市民参加の現状を整理する。また、市民参画と「まちWS」の関係を整理するとともに、「まちWS」等による市町村MPにおける市民参画の事例を調査する。

さらに第2段階としては、高知区域MP委の概要と、

区域MP策定にあたっての「まちWS」の留意点を整理する。

第3段階として、整理された留意点から、3つのWS（KJラベルを用いた広域課題抽出WS、方針・計画づくりWS、質疑及び私の提案ワークショップ）の設計を行い、

高知区域MP委での実践を行う。そして、最後に、その実践の結果から一連の広域計画策定段階における「まちWS」手法の成果と課題の整理する(図1)。

2. 都市計画マスタープラン及び参画の状況

2.1 都市計画マスタープランの状況

市町村MPは、1992(平成4)年6月に改定された都市計画法により、「市町村の都市計画に関する基本的な方針」として制定された。これは、都市計画の市町村の主導性をできるだけ認め、地域に密着した都市計画を実現させるための制度であり、市町村が地域の特性に配慮し、市民の意見を反映しながら定めるものである。これにより、注目すべき点として、その策定過程において市民参加を取り入れることが義務づけられた。

1998年現在における策定状況は、市町村MPの策定を受け、2001年5月都市計画法改定により区域MPが制定された。

市町村MPは14.1%が策定済み、41.7%が策定中、44.1%が未着手となっている(表1)[国土交通省,2001]。

高知県内の市町村MPの策定状況は、高知県では現在、都市計画区域を持つ24市町村のうち南国市、伊野町、中村市、宿毛市の4市町村で策定済みとなっている。[大崎,前掲書]

表1 市町村都市計画マスタープラン策定状況(1998年1月末現在)

	市町村数	割合(%)
策定済み	286	14.1
策定中	845	41.7
未着手	894	44.1
合計	2,025	100.0

区域MPが制定されたのは、2001年5月であり、現在、多くの都市計画区域で区域MPが策定中で、策定期間が確定している都道府県は47都道府県中6であり、確定していないが31にのぼっている(表2)。[日本建築学会,2002]

表2 都市計画区域マスタープラン策定期間(2002年10月現在)

時期	都道府県数	割合(%)
確定している	6	12.8
していない	31	66.0
無回答	9	19.1
不明	1	2.1
合計	47	100.0

2.2 市町村都市計画マスタープランにおける市民参加の現状

少し古い資料であるが、国土交通省による調査で市町村MPにおける市民参加の状況を見る。[国土交通省,前掲書]

市町村MP策定過程において、様々な市町村で市民参加が取り入れられている。市町村MP策定において、市民参加の具体的な方法は示されておらず、市民参加の方法は各市町村の創意工夫に委ねられている。最も多いのは「アンケート」で、市町村MP策定済みの市町村のうち約77%、市町村MP策定中の市町村のうち約81%が計画策定に取り入れている。また、その次に多いのは「市の素案を示しての住民説明会」で、市町村MP策定済みの市町村のうち約38%、市町村MP策定中の市町村のうち約47%が計画策定に取り入れている。その他、自治体によっては、まちづくりフォーラム(意見交換会)やポスターセッションの実施、まちづくり委員会の編成、インターネットによる情報公開、PR、意見収集などを行った自治体も存在する(図2)。以上に見るように、アンケート調査や説明会、ヒアリングなどといった従来型の市民参加手法がほとんどである。市民参加にあまり工夫をこらさず、行政が主体となって策定する市町村MPが多い。

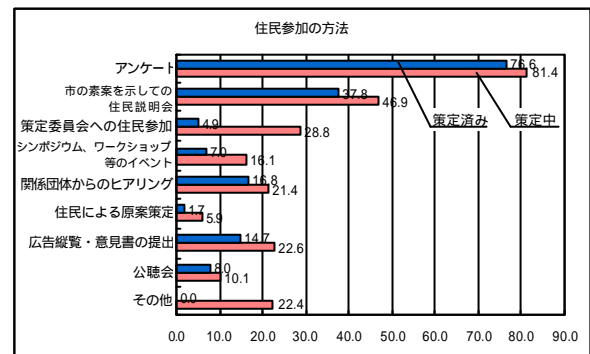


図2 市町村都市計画マスタープランにおける市民参加の方法

2.3 市町村都市計画マスタープランにおける市民参加手法の事例

- 省略 -

2.4 市民参画手法としての「まちWS」の位置づけ

2.4.1 市民参加手法のレベル分け

市民参加のレベル分けとしては「公開手法」、「意見収集手法」、「公聴手法」、「協議・検討手法」の4段階がある。そして、第4段階の「協議・検討手法」には、意見交換会、シンポジウム、まちWSなどがあげられる。これらは、市

民が行政とともに策定現場で計画を検討したり、提示された素案の内容を深く検討するもので、「目標や問題設定などの計画の策定段階から、具体的な手段の選択と選択肢の絞り込み、代替案の作成、推奨案の決定といった、意思決定に関わる分野までを対象としており、市民が積極的に計画に参画できるものである。」[大崎,前掲書]と述べている。

表3 市民参加手法の段階構成

レベル	手法	内容	主体
第1	公開手法	情報公開 広告の閲覧 方針案のパネル 展示など	行政
第2	意見収集 手法	アンケート ヒアリングなど	
第3	公聴手法	公聴会 説明会 ポスターセッション インターネット や広報誌による 意見の収集など	
第4	協議・検討 手法	意見交換会 市民によるまち づくり委員会 編成 シンポジウム ワークショップ など	行政 市民

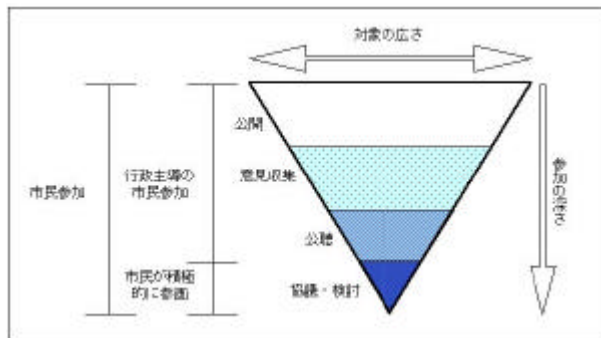


図3 市民参加手法の段階構成

2.4.2 市民参画におけるワークショップ手法の位置づけ

WSとは、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり、創り出したりする学びと創造のスタイルであり、「参加」「体験」「グループ」という3つのキーワードからなる「学習法」＝参加体験型のグループによる学び方である。

まちづくりにおける「まちWS」では、「まちづくりをテーマに集まる人々が共に参加し、調査活活動・資源の発見・課題の設定・提案の作成・実現のための仕組みの検討などの共同作業を行う会合」を指す。そのため、市民参画手法として、有効な協議・検討手法とし、多くの計画策定段階において用いられている。WS手法は前に述べた市民参加のレベル分けにおいて「協議・検討手法」に位置づけられている。

3 高知広域都市計画区域マスタープラン検討委員会の概要

3.1 高知広域都市計画区域の概要

高知広域都市計画の対象区域は、高知市を中心とした高知県中央部2市3町（高知市、南国市、土佐山田町、伊野町の一部、春野町全域）で構成されている。区域の総面積は、29,779ha（県全体の4%）であり、人口は44万3千人（県人口の54%）である（図4）。

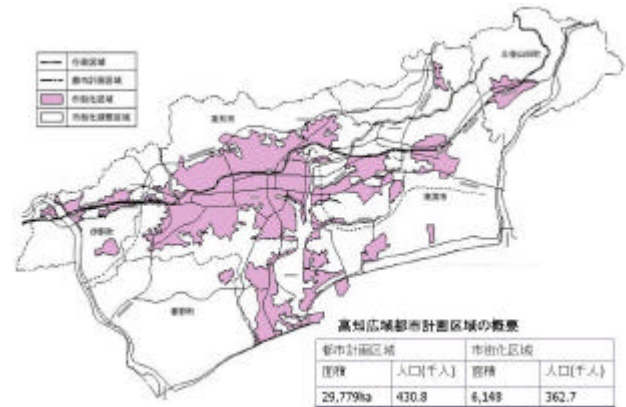


図4 高知広域都市計画区域現況図

3.2 高知広域都市計画区域マスタープラン検討委員会の概要

高知区域MPでは、平成14年度に「高知区域MP委」を発足し、委員は県民参加とし、HP、公聴会等から委員を一般公募、学識者、建築家など県からの指名による委員（12名）、H13高知県改正都市計画法検討委員会のメンバー（6名）、県庁内部局及び2市3町自治体から参加の計35名で構成されている。

高知区域MP委は、「まちWS」形式によって5回開催された。（表4）

表4 検討委員会におけるワークショップ手法実施日時

回	ワークショップ手法	月日
1	KJラベルを用いた広域課題抽出ワークショップ	平成2002年6月5日
2	方針・計画づくりワークショップ	平成14年8月1日
3		平成14年9月6日
4		平成14年10月17日
5	質疑及び私の提案ワークショップ	平成14年12月3日

3.3 都市計画区域マスタープラン策定にあたってのまちづくりワークショップの留意点

3.3.1 広域策定における参加の難しさ

広域計画策定段階における参加の難しさとして、中井は、「住民生活体験の実感が希薄になり参加の対象である計画の内容が抽象的になること、参加した結果が計画に反

映されにくいから、参加そのものへの動機が希薄になる、
 広域の計画の場合には、ステークホルダー（利害関係者）
 の数が増え、主体も多種多様になる」[中井,2002:17-23]と
 述べている。

3.3.2 広域計画策定段階でのワークショップ設計にあたっての留意点

広域計画における参加の難しさを受けて、WS設計の留意点を下表にまとめる(表5)。

表5 ワorkshop設計の留意点

ワークショップ設計の留意点
即地的表現を行えるようにする 計画の内容が抽象的にならないように、具体的なモデル地区を選定し、即地的表現を行えるように留意する。
対象地域の明確な理解 対象地域を明確に理解するために、参加者が限られた時間内に学習できるよう留意する。
参加者同士の情報・問題意識・認識の共有と相互理解 広域の計画の場合には、ステークホルダー（利害関係者）の数が増え、主体も多種多様になる。WSでは参加者同士の意見や認識に食い違いが生じる。そのため、参加者同士の情報や問題意識・認識と相互理解が行えるように留意する。
参加した結果の計画への反映 参加した結果が計画に反映されにくく、計画への参加そのものの動機が希薄にならないようにするために、前述してある留意点に基づき、WSの結果が計画に反映されやすいよう努める。

4. 高知広域都市計画区域マスタープランにおけるワークショップの設計と実践

4.1 KJラベルを用いた広域課題抽出ワークショップの実践

4.1.1 ねらい

第1回高知区域MP委では、委員が認識すべき課題・現況を出しながら、各委員の思いを議論し、高知区域MP委の議論すべきテーマを抽出することをねらいとした。ここではKJラベルを用いた広域課題抽出WSを実践し、まちWSの課題を整理することをねらいとする。

4.1.2 設計

第1回高知区域MP委では、参加者同士の情報・問題意識・認識の共有と相互理解を主に図るため、KJ法を応用した。

KJラベルへの記入は、質問に対し解答を記入してもらう。質問は現状の整理を行い基礎を作成することをねらいとした質問が2つ、議論すべきテーマを抽出することをねらいとした質問が1つである(表6、表7)。

表6 KJラベルを用いた広域課題抽出WSで用いた質問

KJラベルを用いたワークショップで使用した質問	質問のねらい
質問 「高知の都市の現状及び都市計画の現況で、問題があると思うことはどのようなものでしょうか？」	WSのウォーミングアップ・現状の整理
質問 「高知の良いところ、誇りに思えるところにはどのようなものがありますか？」	
質問 「今回の検討会において議論すべき主要なテーマを3つ挙げてください。」	議論すべきテーマの抽出

表7 KJラベルを用いた広域課題抽出WSの流れ

段階	ステップ	具体的な内容
	質問の回答をKJラベルに書く	設問に対して思いつくまま、出来るだけ多くKJラベルに記入する。KJラベル(カード)には『と』とは書かず、『』のみ(一つのこと)書く。
	質問を分担する	各質問の解答を班ごとにまとめていく。 《1班、2班》- 質問 についてまとめる。 《3班、4班》- 質問 についてまとめる。 《5班、6班》- 質問 についてまとめる。
	内容が同じものにわけ	同じ内容のものをカードに重ねる。
	ワークシートにまとめる	内容をひとまとめたタイトルをつける。カードをワークシートに配置し貼り付ける。ワークシートへ記入する。
	チームリーダーがグループでまとめたものを発表する	チームリーダーがグループでまとめたものを発表する。
	全体の整理	ワークショップで出来上がったワークシートを整理する。
	アンケートの実施	WSについてのアンケートを行う

4.1.3 実践とその結果

KJラベルによる広域課題抽出WSは、の参加者は36名(一般公募12名、県庁内14名市町村5名その他5名)であった。質問、質問、質問ともにワークシート1枚にまとめを行った。

質問 のまとめ(写真1)

- 省略 -

質問 のまとめ(写真2)

- 省略 -

質問 のまとめ(写真3)

質問3に対するWS結果の整理を行った(図5)。まとめられた結果は、「自然環境・景観」「安全なまちづくり(防災)」「交通機能の向上」「住環境」「手法(実現の方法)」

「住民参加」「少子高齢化」「将来の都市像」があげられ、第二回以降のテーマとなった。



写真1 ワークシートの結果例

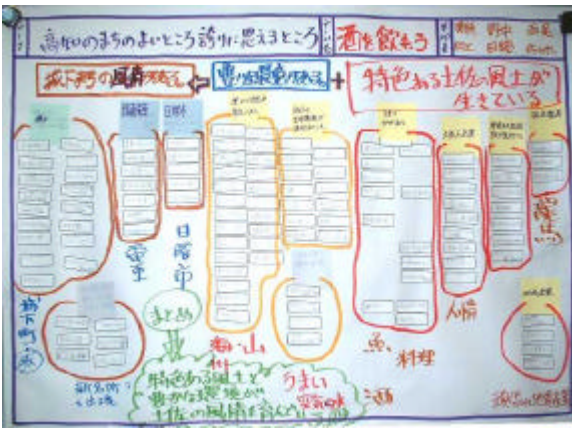


写真2 ワークシートの結果例

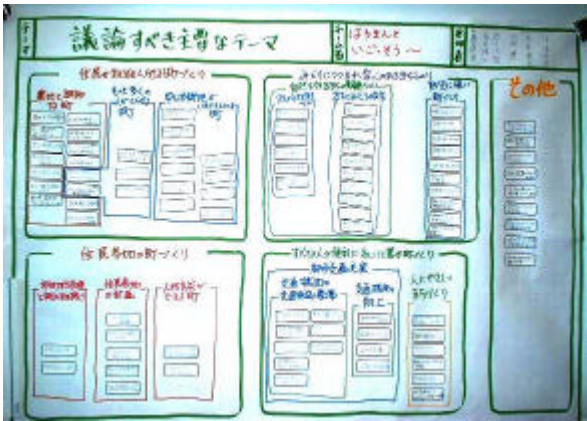


写真3 ワークシートの結果例

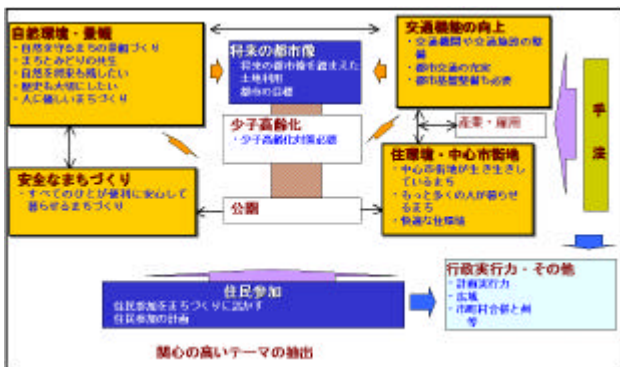


図5 整理した今後議論すべきテーマ

4.1.5 参加者及び聴者の評価

参加者に対するアンケート

グループ発表終了後参加者に対するアンケートを行った。全参加委員 36 名中 35 名が解答（回収率 97.2%）した。回答者の 82.9%（29 名）が WS に対して「おもしろかった」という評価をしている。また、81.1%（28 名）は KJ 法が有効であったと評価した。[武内,2001]

聴講者に対するアンケート調査

- 省略 -

4.2 方針・計画づくりワークショップの実践

4.2.1 ねらい

方針・計画づくり WS では、KJ ラベルを用いた広域課題抽出 WS の結果をもとに、即地的な方針・計画の表現を行えるまち WS の開発とその課題を整理することをねらいとする。

4.2.2 設計

方針・計画づくり WS の開発にあたり、参加者の学習、既存計画との重複回避、新しい計画の提案、即地的計画の表現をねらいとして、まち WS プログラムの開発を行った。

モデル地区の設定

KJ ラベルを用いた広域課題抽出 WS の結果から、議論すべきテーマが決まったが、区域 MP は広域であり、テーマごとに議論を行えば地区の特性に応じた方針・計画案を作成できない。そのために、課題を一般化できるモデル地区として、中心市街地、市街地周辺部、農住隣接区域の選定を行い。モデル地区ごとに、まち WS を行っていく(図 6)。

ワークショップの方法

方針・計画づくり WS の構成は、地区の現況と既存計画の把握を行い、対象地区の方針を検討し、既存計画で必要な計画・新しい計画案を整理を行う。それらの計画案を即地的表現を行い、具体的な計画実現の方法と住民参加の方法を検討する。(図 7)

方針・計画づくり WS は、図 8、図 9 のようなワークシートを用いて行った。ワークシート上の書くスペース(作業)のねらいは表 8・9 のとおりである。

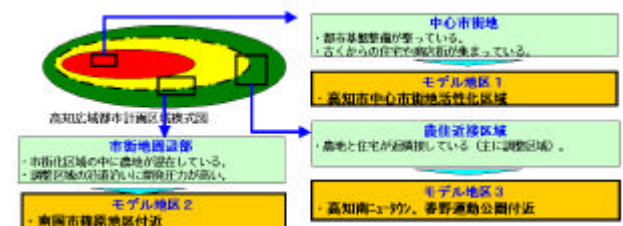


図6 選定したモデル地区

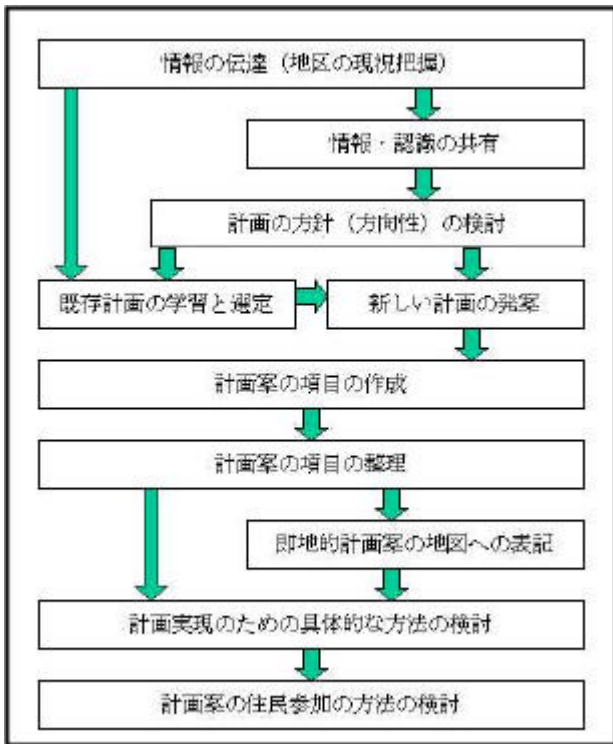


図7 方針・計画づくりワークショップの構成

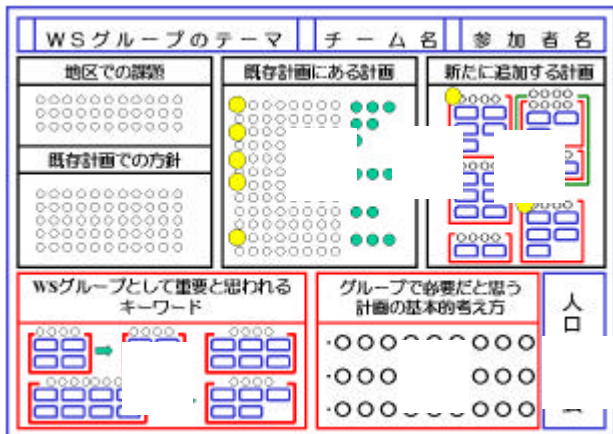


図8 方針・計画づくりワークシート1

表8 方針・計画づくりワークシート1における作業工程

段階	作業の内容とねらい
	事前に整理された地区での課題、既存計画の方針などから重要と思われる計画の方針をKJラベルに書き出し整理する(参加者の学習・認識の共有と相互理解・既存計画の方針の整理)。
	整理された内容を中心にグループで必要だと思う計画の基本的考え方をまとめる(参加者の学習・認識の共有と相互理解・既存計画の計画の整理)。
	グループで必要だと思う計画の基本的考え方を基に、人口フレームをグループで検討する(認識の共有と相互理解)。
	グループで重要と思われる既存計画をまず個人でシールを用いて選択する(参加者の学習・参加者同士の意見の確認)。
	新たに追加する計画をKJラベルに書き出し、整理する(新たな計画の提案)。
	グループとしての計画案に選ぶものにシールを貼る(グループの計画案の選択)。

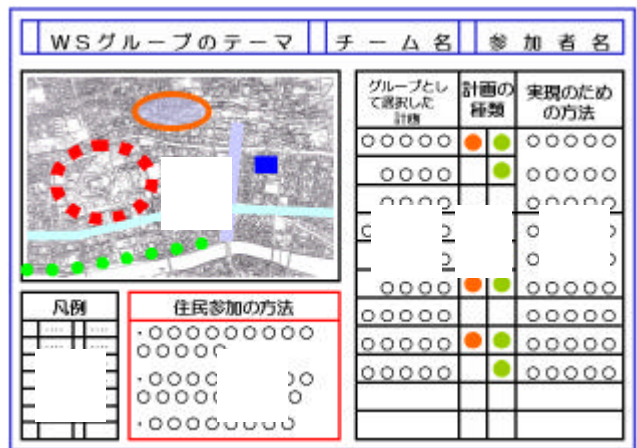


図9 方針・計画づくりワークシート2

表9 方針・計画づくりワークシート2における作業工程

段階	作業の内容とねらい
	シート1で選んだ計画案を関係を考えながら書き写す(選んだ計画案の整理)。
	「新しく追加した計画」と「ある範囲を対象とした計画」がわかるように計画の種類にシールを貼る(計画案の種類)。
	地図上に計画を記入する。そのときに使用する線や印などを凡例に記入する(即地的計画の明確な表記)。
	計画案の実現のための方法について、グループで話し合いながら記入していく(計画案の具体性の向上)。
	計画案に基づき、住民参加の方法について話し合い記入する(計画案を行なう際の住民参加の方法について考える)。
	チームリーダーがグループでまとめたものを発表する。
	質問カードに記入する(WSのなかでの疑問、意見を記入する)。

4.2.3 実践と結果

中心市街地においての方針・計画づくりWSの参加者は30名(一般公募11名、県庁内9名、市町村5名、その他5名)で行った。市街地周辺部においての方針・計画づくりWSは参加者は31名(一般公募12名、県庁内7名、市町村3名、その他9名)で行った。農住近接区域においての方針・計画づくりWSは参加者は30名(一般公募11名、県庁内9名、市町村5名、その他5名)で行った。

計画・方針づくりWSは以下のような結果が得られた県庁内4名、市町村5名、その他4名)で行った。

計画・方針づくりWSは以下のような結果が得られた(写真5・6)。

中心市街地

- 省略 -

市街地周辺部

- 省略 -

農住近接区域

- 省略 -



写真4 ワークショップの風景

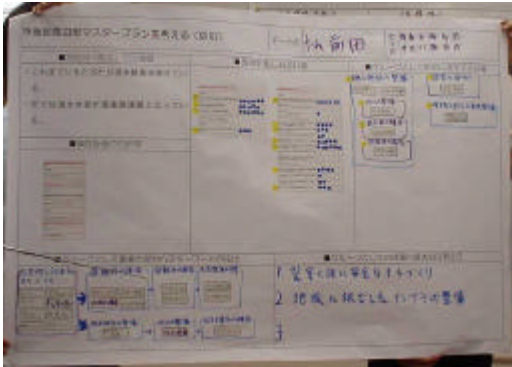


写真5 ワークシートの結果例



写真6 ワークシートの結果例

4.3 質疑及び私の提案ワークショップの実践

4.3.1 ねらい

WSの結果を反映した事務局による計画素案を提示し、それに対する質の高いまとまった質疑・提案を出してもらおう。また、各委員からの計画への最終提案を出してもらい、それについても質疑を行ってもらおう

4.3.2 設計

ワークショップの結果を反映した計画素案についての質疑を行うために、質問は、短時間で質の高い質疑を行えるようにグループで認識・情報の共有を行い、質問の整理を行う。

また、前回までのWSで出す事の出来なかった提案などを委員に提案を行ってもらい、その提案についても質疑を行う。

表 10 質疑及び私の提案ワークショップにおける作業工程

段階	具体的な内容
事務局による計画素案の提示	事務局が作成した計画素案を説明する。その説明に対する質問を各自ポストイットへ記入する。あらかじめ私の提案を考えていなかった委員は、このときに作成してもらおう。
私の提案の説明	各委員は私の提案を説明する。このとき、他の委員はポストイットに質問を記入する。
質問をまとめる	ポストイットに書かれた質問を各グループごとで、2つの質問にまとめる。
質問を発表する	グループのリーダーは、グループでまとめた質問を発表する。コーディネーターは、質問の整理を行う。
質疑をする	コーディネーターの整理した質問に対し、事務局、委員は、その質問について答える。追加質問などはグループ質問のあとに行う。

4.3.3 実践と結果

質疑及び私の提案ワークショップの参加者は28名(一般公募11名、県庁内5名、市町村5名、その他7名)行った。

質疑及び私の提案WSでは、道路整備、住宅など、その他の土地利用に関する提案のほか、環境や市民参加などの提案がなされた(写真8)。

私の提案ワークショップの結果

- 省略 -

質疑ワークショップの結果

- 省略 -



写真7 ワークショップの風景

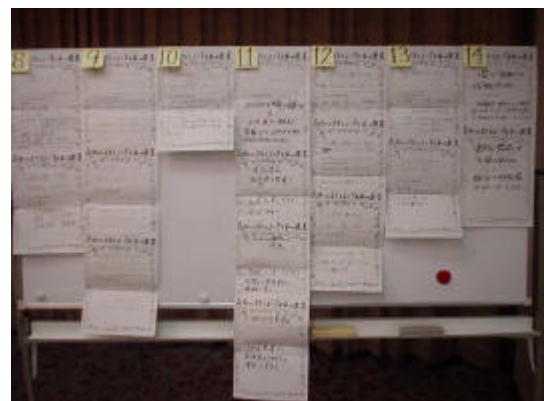


写真8 ワークシートの結果例

5. 広域計画策定段階におけるワークショップ手法の成果と課題の整理

5.1 ワークショップ手法の役割分類と整理

広域計画策定段階におけるWS手法の成果と課題を整理するために、伊藤による「WSプログラムのための役割分類項目」を使用する[伊藤:2001,27]。

表11の「WSプログラムのための役割分類項目」に、実践を行った広域計画策定段階におけるWS手法を当てはめた。

(表12)

表11 ワークショッププログラムのための役割分類項目

1)情報伝達プログラム[みんなに伝える] (1) 情報を伝える 全体の場で誰かが情報を伝える (2) 情報を共有する 参加者の持っている情報を出し合う
2)体験共有プログラム[体験して理解する] (3) 現場を体験する 現状を調べる、現場で何かをする (4) 現場で確認する 計画案の現場で確認し、検討する
3)意見表出プログラム[みんなで考え意見を出し合う] (5) 意見を集める 賛成や反対などのいろいろな考えやアイデアを集める (6) 思いを集める 自分の希望や思いを書き出す (7) 使い方を想像する 実際に何が起きるかどうなるかをシュミレーションしてみる
4)想像表現プログラム[提案や計画案を作り表現する] (8) 思いを表現する 自分の希望を表現する(短歌・俳句、演劇等) (9) 体験して理解する 実際に何かを作ったり、表現したりする (10)提案を作成する デザインゲームなどで計画案やルールなどの提案を作る (11)グループで発表する グループで話し合った結果や作った提案を発表する
5)意見集約プログラム[それぞれの意見を理解し調整する] (12)問題提起する 論点を絞って課題を投げかける (13)意見を調整する いくつかの意見を調整してまとめる (14)提案を修正・評価する 提案を検討したり修正したり、評価する (15)専門家のコメントを聞く 専門家に考えを整理してもらう
6)その他のプログラム (16)WSの感想を残す その回のワークショップについて感想カードを書いてもらう

表12 ワークショッププログラムのための役割分類項目に当てはめた広域計画策定段階におけるWS手法

役割分類項目	KJラベルを用いた広域課題抽出WS	方針・計画づくりWS	質疑及び私の提案WS
1)	(1)		
	(2)		
2)	(3)	-	-
	(4)	-	-
3)	(5)		
	(6)		
	(7)	-	-
4)	(8)	-	-
	(9)	-	-
	(10)	-	-
	(11)		
5)	(12)		
	(13)		
	(14)	-	-
	(15)		
6)	(16)		-

5.2 広域計画策定段階におけるワークショップ手法の成果と課題の整理

5.2.1 成果と問題点

広域計画策定段階におけるワークショップ手法の成果と問題点の整理を事項図（表 13）にまとめた。

表 13 広域計画策定段階におけるワークショップ手法の成果と問題点

	成果	問題点
KJラベルを用いた広域課題抽出ワークショップ	<p>参加者同士の情報伝達と共有が出来た</p> <p>KJラベルを用いることにより、参加者同士の情報の伝達、共有が行えた。</p> <p>参加者の意見集約が出来た</p> <p>参加者の意見や思いを集約する事が出来た。</p> <p>結果の報告が出来た</p> <p>グループでの発表をおこない、全体へのグループの結果を報告できた。</p> <p>専門家のアドバイスが出来た</p> <p>グループの報告に対し、専門家から現状や課題について整理し、総括を行えた。</p> <p>意見調整・問題提起が出来た</p> <p>グループ内での作業を通じ、意見の調整、問題の定義などを行うことが出来た。</p> <p>参加者のWS評価が出来た</p> <p>ワークショップに対する感想についてのアンケートを行うことにより、参加者のWSに対する考え方や評価などを知ることが出来た。</p> <p>テーマの抽出が出来た</p> <p>WSの結果を基に、専門家を交えながら、今後議論すべきテーマの抽出を行うことが出来た。</p>	<p>参加者の「思い」の掘り下げが十分でなかった</p> <p>参加者の「思い」の掘り下げを十分に出来たかに不安がある。</p> <p>討議時間をもっと多くとる必要がある</p> <p>時間に終われる形になってしまい、討議、「思い」の表現が十分にできなかった。</p>
方針・計画づくりワークショップ	<p>情報の共有・学習が出来た</p> <p>既存計画の方針・計画を整理することにより、情報の共有・学習を行うことが出来た。</p> <p>新しい計画案の提案が出来た</p> <p>既存計画の方針・計画を整理し、新たな計画を提案する事により、既存の計画と重複しない提案する事が出来た。</p> <p>具体的計画案の提案が出来た</p> <p>地図へのデザインを行ったことにより、参加者の持っている情報の共有、具体的な計画案の提案が行えた。</p> <p>意見調整が出来た</p> <p>多くの既存計画と参加者の意見をうまく調整する事が出来た。</p>	<p>現場体験が出来なかった</p> <p>モデル地区を選定し、WSを行ったが、広範囲であり、作業のスケジュールから、現場の体験や確認を行うことが出来なかった。</p> <p>計画案の実現性が不十分</p> <p>計画案を提案する事はできたが、主に、意見収集のみになり、その計画案についての具体的なシミュレーションを行うことはできなかった。</p> <p>計画案評価が出来なかった</p> <p>作業スケジュールが過密であったため、グループで作成した計画案の評価をその場で細かく行うことはできなかった。</p> <p>認識と計画づくりをやるには無理があった。</p> <p>計画・方針づくりワークショップでは、多くの資料を使用したため、WSの作業の超過にもなり、参加者に負担をかけてしまった。</p>
質疑及び私の提案ワークショップ	<p>情報の周知が出来た</p> <p>計画の素案を説明する事により、参加者がWSの結果をもとに計画がどのようになっているのかの情報を知ることが出来た。</p> <p>参加者同士の認識・意見の共有が出来た</p> <p>参加者が「私の提案」、「質問」を行うことにより、参加者同士の認識や意見を共有する事が出来た。</p> <p>論点を絞った質問が出来た</p> <p>質問をグループで議論・整理、グループから出された質問を専門家により整理を行ったので、論点を絞った質疑を行うことが出来た。</p>	<p>時間が超過した</p> <p>「私の提案」は意見の調整を行わず、参加者全員が可能な限り提案を発表したため、時間が超過した。</p>

5.2.2 課題

広域計画策定段階におけるワークショップ手法の課題の整理を下記（表 13）にまとめた。

表 13 広域計画策定段階におけるワークショップ手法の課題

<p>1) 時間を取る必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業の余裕のあるスケジュールの作成 ・WSの回数を多くする
<p>2) 地区のイメージを捉える「まちWS」を導入する必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現場での見学・調査などが必要 ・地区のイメージを確認できる資料作成
<p>3) 多量の資料を学習する「まちWS」を導入する必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画策定に必要なテーマに関する「まちWS」を実施 ・わかりやすい資料による参加者負担の回避
<p>4) パートナーシップによるまちづくり体制の確立の必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民が自由な提案、自主的な活動への支援する仕組み ・住民と行政のパートナーシップの位置づけ
<p>5) 「まちWS」を実施するために専門家が重要である</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民の力を十分に発揮させる専門家 ・「まちWS」の結果が計画へ反映できる専門家

引用・参考文献

- ・荒木英昭、他、1999、「高知県におけるワークショップ手法による県民参加の現状と課題」(社)土木学会四国支部社会資本問題研究委員会 / 四国地方における社会資本整備の進め方に関する調査研究業務委託平成 11 年度業務委託成果報告書 p101 ~ 133
- ・浅野聡、1999、「伊勢市都市マスタープラン市民ワークショップ成長期 1999 - 総合的な「協働型まちづくり」システムへ」NIRA 政策研究 1999 Vol.12 No.12 p44 ~ 49
- ・有元和哉、他、2000、「中山間地域活性化計画策定におけるワークショップ手法の活用事例 - 馬路村魚梁瀬地区での活性化方策づくりワークショップ - 」土木学会四国支部第 6 回技術研究発表会講演概要集 p300 ~ 301
- ・伊藤雅春、2001、「建築・まちづくり計画における住民参加手法としてのワークショップの研究 - コミュニティの自立化をもたらす計画論 - 」千葉大学大学院自然科学研究科人間・地球環境科学科専攻環境建築学講座コミュニティ環境計画学
- ・内田晃、他『地方都市の都市計画マスタープランにおける策定プロセスと住民参加に関する研究 - 九州地域 74 自治体におけるケーススタディによる検証 - 』日本都市計画学会論文集 No.33 p.457 ~ p.462
- ・大谷英人、他、2000、「高知県におけるワークショップ手法による県民参加の現状と課題」土木学会四国支部第 6 回技術研究発表会講演概要集 p274 ~ 275
- ・大谷英人、2001、「市町村総合計画策定過程における「まちづくりワークショップ」の活用と展開可能性 - 計画さロプロセスにおける合意形成システム及び市民と行政・計画者とのパートナーシップシステムの確立に向けて - 」平成 11,12 年度科学研究費補助金（基盤研究◎(2)）研究成果報告書
- ・大谷英人、2002、「まちづくり雑記帳」若竹まちづくり研究所
- ・大坂谷吉行、他「室蘭市総合計画の策定プロセスと問題点 - 新総合計画と旧総合計画の比較と市民参加を中心に - 」日本建築学会技術報告集第 10 号 p257 ~ 262 / 2000 年 6 月
- ・大崎美香、他、2002、「都市計画マスタープランの策定状況 - 都市計画マスタープランにおける市民参加の課題その 1、その 2 - 」日本建築学会四国支部研究報告集第 2 号 p31 ~ 34
- ・大和田清隆、他、1998、「ワークショップ方式による都市計画マスタープラン策定成果と問題点 - 東京都調布市を例として」日本建築学会 1998 年度大会学術講演梗概集(九州)p251 ~ 252
- ・小林隆、他、1999、『マスタープランニングにおけるインターネット電子会議室の利用可能性』日本都市計画学会論文集 No.34p.469 ~ p.474
- ・国土交通省都市局 HP、2001（<http://www.mlit.go.jp/crd/city/index.html>） / 更新日時：2001 年 6 月 6 日
- 武内俊樹、2001、「K」ラベルを用いた広域課題抽出ワークショップの方法と課題 - 高知広域都市計画区域マスタープラン第一回検討委員会におけるアンケート調査 - 」
- ・日本建築学会都市計画委員会・土地利用小委員会、2002、「都道府県都市計画区域マスタープランに関するアンケート調査（中間集計 2002 年 10 月 21 日）」
- ・中井検裕、2002、「マスタープランの策定と住民参加」財団法人都市計画協会 / 新都市第 56 巻第 7 号 p17 ~ 23
- ・廣澤靖子、他、2002、「計画案評価及び計画案しぼり込みワークショップの方法とその有効性その 1、その 2、その 3」日本建築学会四国支部研究報告集第 2 号 p37 ~ 40
- ・松永昭博、他、2001、「小松島港地区活性化に向けた市民参加型計画づくりの報告」第 24 回土木計画学研究発表会講演集 Vol.24 講演番号 137
- ・渡辺俊一、1999、「市民参加のまちづくり - マスタープランの現場から - 」学芸出版社

Application and Findings of new Workshop Technique in Urban Master Planning Stage

-A Case Study of Master Plan Examination Meeting of Kochi City and Its Surrounding Areas-

1055132 Kazuya Arimoto

Abstract

Purpose of Research

The purposes of this research are to develop new workshop technique and apply this technique in practice by using the case study of master plan examination meeting of Kochi city and its surrounding area including Tosayamada town, Nankoku city, Haruno town and Ino town. Moreover, this research also aims to discuss the findings i.e., problems and improvement areas of this new technique from its application. Ultimately, by examining these objectives, this new workshop technique is proposed as a planning technique in urban master planning stage.

Research Methodology

This research firstly investigated present state of master plan of each city in case study and public participation techniques. The various “meeting” techniques in public involvement concept were reviewed from several literatures. Then, the new workshop technique was developed and applied in master plan examination meeting of Kochi city and its surrounding areas.

New Workshop Technique Process

The new workshop technique consists of three main processes. The first process is to identify conditions, problems, discussion themes in the studied area. The KJ label technique is used in this process. The second process is aim to make alternative policy and plan by using workshop technique. The final process is to draw and examine the questions and opinions from all participants regarding the alternative policy and plan in order to propose the final policy and plan later on.

Conclusion

Based on the result of application of this new workshop technique, the problems and areas of improvement were found out for future master plan examination. In brief, all participants should recognize the importance of urban master planning concept and implement the planning technique used for developing the entire master plan of particular region.